

<牧会ミニ通信>No.16 2020.8.9

私の長年住み慣れた横浜市鶴見区には、曹洞宗・大本山「總持寺」があります。そこは、幼い時からの遊び場でした。修行している僧侶の様子を大祖堂の外から、しばしばのぞき見していました。父親は五人兄弟なのですが、二人が寺の住職であり、息子たちも寺の後を継いでいました。さらに、姉たち二人も、仏教系のミッションで学んでいました。

キリスト教会との接点といえば、近くに旧日基の「鶴見教会」がありました。風呂敷片手に、背筋を伸ばし、町中を歩く、紳士的な牧師の姿を日常的に拝見していました。牧師の長男とは友達であり、教会裏にある師宅でよく遊びました。ところが、家の中があまりにも閑散としており、牧師の家庭の貧しさに驚きました。

母は、聖路加病院の看護学生の一期生でした。不思議と母のものと思われる黒塗りの十字架像が部屋の片隅にありました。

二十歳過ぎた頃、伝道者と出会いました。その頃からです、教会に通い始めたのは。その後、内村鑑三の「後世への最大の遺物」を手にし、「どれほどの苦労があり、どれほどの赤貧に甘んじることがあっても、生涯を燃焼し尽くすことのできる働きを見つけること。これが人生で一番大切なことである」との言葉に触発されて、献身ということを考えました。

「森有正」さんが、ノートルダム寺院で、献金を集めにきた若い修道士の姿を見たご婦人が、「おかわいそう、わかいいみそらでお気の毒ね」との感想をもらした時、森さんは「いいえ、若い時に自分の行く末が決まっている彼は仕合わせだとおもいます」と申されたのです。

「過ぎ行くこの世、朽ちゆくわが身」(讚美歌538)とすれば、心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、なお足らざるを覚えるほど、献身しうるお方と出会えたとすれば、これにまさる幸せはないと言わざるをえません。わたしが献身を思う前に、「神は、その独り子を賜わった」という神の献身の事実がありました。ヨハネ3章16節は、まさしく神の献身の告知であります。わたしの献身の生涯は、そのお方を起点として始まりました。

周東のぞみキリスト教会： 牧師 結城 晋次